



絹の道

浜街道（絹の道）

八王子市鎌水の柚木街道から山間に消えゆく一本の道がある。往時栄えた「絹の道」の名残りである。八王子は江戸時代から養蚕や製糸で栄え「桑都」と呼ばれていた。

幕末頃、鎌水では良質の絹織物が織られ、高価な値段で大量に取引されるようになった。商魂逞しい仲買い商人が巨財を築き、「鎌水商人」と呼ばれるようになった。人工三百人足らずの村で、十人近い豪商が生まれたという。横浜開港とともに生糸は貿易の花形となり、鎌水から荷車で横浜へと運ばれて行った。その往還が浜街道であり、絹の道である。

だが明治維新は時代を一変させた。富国殖産政策により大製糸工場が築かれ、鉄道運輸が発達するとともに鎌水の商人たちは急速に没落していった。幕末から明治初期、小さな村に栄華を築いた鎌水商人は、バブルの如く崩壊し、時代の流れに消えていった。

◇散歩のみどころ

JR横浜線片倉駅から旧浜街道を歩き、鑓水の小泉屋敷まで凡そ5kmの行程。

駅を出て兵衛川の釜貫橋を渡り、五分程歩くと慈眼寺である。鑓水商人が寄進した梵鐘が保存されている。寺の出入口には鑓水への道標があり、そこから宅地化の進んだ登り坂の街道を大塚山公園（道了堂跡）まで暫く歩く。公園から鑓水三叉路までの一・5kmが古の面影残す浜街道（絹の道）である。三叉路から少し歩くと、絹の道資料館。その斜め前が伝一里塚榎である。農道を右に折れて諏訪神社へ。ここにも鑓水商人が寄進した灯籠や素晴らしい彫刻の本殿がある。浜街道に戻り、大栗川の御殿橋脇の八王子道道標を見、山際を永泉寺へ。ここは、芭蕉句碑や鑓水商人の家を移築した古刹である。又街道へ戻り、嫁入り橋を渡って都指定文化財の小泉家屋敷へ。ここが解散。

●浜街道と横浜線

「浜街道」とは八王子市鑓水の集落を南北に貫き、幕末から明治期に絹の生糸を八王子から横浜に運んだ道である。

幕末に近い嘉永六年（一八五三）江戸湾（東京湾）に米国よりペリーが黒船と共に現れ幕府と交渉の末、安政六年（一八五九）神奈川宿の小さな横浜の漁村に居留地ができ、港が開港されたと同時に貿易も始められた。主な貿易品は、幕府の小判（金貨）で、金と銀の価値の比率が欧米と異なっていたため、銀を日本に持ってきて小判（金貨）と交換して持ち去った不平等な取引があった。幕府も欧米との取引に一両の三分の一の重さの「万延小判」で対処したが、逆に国内の物価高騰を招いた。

幕府の要人小栗上野介が、小判と金貨の分析実験を主張し交換比率が見直された（当時は不平等な条約で取引されていた）。その後幕府は崩壊。

時代とともに輸出の花形となったのが生糸（製糸業）だった。

埼玉の秩父や山梨の巨摩辺りから集散地の八王子に集められた生糸は片倉から鑓水峠（大塚山公園）を通り、約40km離れた横浜に集められた。

寒村の鑓水は俄かに活気を挺し、「銀の生糸、黄金色に見える生糸、即金になる生糸」ともてはやし、時流に乗った鑓水の農民は富を得るため浜街道といわれる道を横浜へ歩いた。そして一代にして巨富を築いた農民もいた。しかし、明治四十一年（一九〇八）、鉄道（横浜線）が開通し、八王子の物資は鑓水の集落を通らず、片倉、相模原、町田を通り横浜へと運ばれた。人や馬車の往来で栄えた鑓水からは活気が消え、往來の要であった浜街道は使命を終えた。

鑓水で一番の富を築いたといわれる八木下家跡に平成二年（一九九〇）三月「絹の道資料館」が建てられ、当時の繁栄を見る事ができる。

● 浜街道と絹の道

幕末期から明治初期まで、八王子の八日町交差点から横浜まで全長約四十km程の道を浜街道と呼んでいた。その後、昭和二十年代末、「八王子ふだん記の会」橋本義夫の命名による「絹の道」の名が広く知られる様になった。

皇国地誌には、「神奈川往来、八王子ヨリ神奈川へ通路。辰二十八度多摩郡小山村ヨリ通シ、斜メニ東北部ヲ経過スル、二十四町四十間五尺亥九度ニ至リテ同郡片倉村ニ連絡ス道敷二間、但程概ネ坂路ニシテ鑛水峠アリ」と記されている。横浜付近では今でも浜街道と呼んでいる。

① JR 横浜線・片倉駅

明治四十一年（一九〇八）九月、横浜鉄道株式会社によって、東神奈川と八王子間が開通。大正六年（一九一七）国有鉄道に買収された。

かつての片倉駅は電車の交換場であつたが、昭和三十二年（一九五七）十二月二十八日、地域の要望により駅として開設された。その後昭和六十三年、高架化工事が行われ現在に至っている。



JR 横浜線片倉駅北側



片倉駅の開通祝賀の門
（昭和 33 年 1 月）



横浜線片倉付近を通過中の
蒸気機関車（昭和 10 年代）

② 浜街道道標

八王子市片倉町九四九

J R 片倉駅脇の浜街道（絹の道）から兵衛川に架かる釜貫橋を渡り、少し行くと慈眼寺の参道入口に着く。高さ1mの浜街道道標が立っている。

- ・ 正面 板橋より壺丁参道
- ・ 左（北側） 至子安村
- ・ 右（南側） 至ヤリ水村
- ・ 裏面 武州多摩郡片倉邑

と文字が刻まれている。

板橋とは現在の釜貫橋のことであり、大塚山を越えて横浜へ生糸を運ぶ浜街道である。



浜街道道標



釜貫橋



兵衛川

③ 白華山 慈眼寺 じげんじ

八王子市片倉町九四四

宗派 曹洞宗
本尊 正観世音菩薩

阿弥陀如来

十一面観音菩薩

開基 心安守公和尚

開創 文安二年（一四四五）

室町前期文安二年（一四四五）畠

中進江らが、この地に阿弥陀堂を建立したといわれている。およそ百四

十年後の天正の中頃、永林寺末寺として開山し、現在に至っている。

八王子城下にあった慈眼寺は「じごじ」と読むが、この寺は「じげんじ」と読む。

慈眼寺とはそもそも「神護寺」または「神宮寺」から転じたもので、神社に付属していた寺を指しているが、この慈眼寺に関してそれとの関連は不明である。



慈眼寺山門

本堂はどつしりと重みを感じる造りで、屋根などに見られる三つ鱗の紋章は北条家紋であり、永林寺の末寺であることがわかる。

慈眼寺の見どころは山門である。赤く塗られた重層の門。両脇に立つ金剛力士像。そして大きく反った屋根など、落ち着いた佇まいの本堂とは全く違った表情を見せている。



慈 眼 寺



慈眼寺山門（室町時代）



金剛力士像



慈眼寺（室町時代）

●戻ってきた梵鐘

慈眼寺の梵鐘は、戦時中、軍へ強制的に供出させられ行方不明であった。戦後、都内某所で発見され、慈眼寺に返却された。この梵鐘には、寄進者である鑄水商人や片倉の人々の名が多く刻まれている。

「安永三年（一七七四）元八王子加藤鋳物師鑄造」と刻まれている。現在、梵鐘はシートに包まれ保存されているため、見ることはできない。

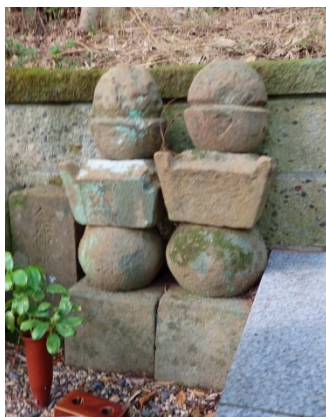


梵 鐘

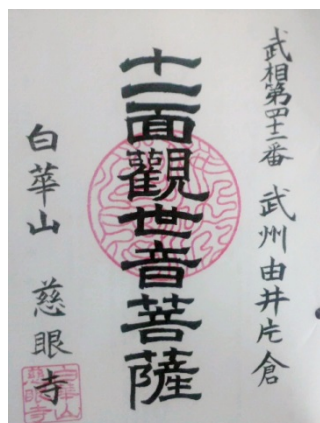
梵鐘に刻まれている
鑄水商人の名前

●五輪塔

慈眼寺の境内にある川幡家のお墓の片隅に五輪塔が二柱置かれている。鎌倉時代に建立したものとわれているが、文字は風化して解読はむずかしい。



五 輪 塔



お 札



武相観世音第 42 番札所碑



境内にある六地藏

④白山神社（釜貫）

八王子市片倉町九六〇

寛文八年（一六六八）の頃、六名の地元の有志によって建立された。釜貫白山宮互建帳に五百文という金額も明記されている。近くにある中山の白山神社との繋がりはないという。

当初は五百mほど南東の地（サンライズ幼稚園の東側辺り）にあった白山山に鎮座していたが、宅地開発の区画整理に伴い平成四年現在地に移された。

ご神体は蛇陀王命（じゃだおうのみこと）である。このご神体は蛇をまとっている。例祭は、元々、四月三日であったが、現在は毎年四月の第一日曜日に執り行われる。土地の氏子を中心となり、今もお祭りの行事を受け継いでいる。



釜貫白山神社の祠



釜貫白山神社



陀蛇王の命



大塚山公園入口



片倉台中央公園

⑤十二州見はるかす

大塚山は三角測量の基準点が置かれ、十二州を見晴らすといわれていた。

十二州とは関東とその周囲十二国で武蔵、相模、上野、下野、常陸、上総、下総、安房、の八国と伊豆、駿河、甲斐、信濃のことである。

かつては、ここからそれらの国々の山々を眺望することができたという。

具体的には、相模大山、上野赤城山、下野日光山（男体山）、常陸筑波山、下総台地、上総鹿野山、安房鋸山、伊豆大島、駿河富士、甲斐郡内の山、信濃浅間山などがあげられる。今でも冬の気象条件のよい日には目をこらせば、これらのうちいくつかの山々が見られる。



十二州見晴らしの一部



大塚山公園より八王子方面を望む

⑥大塚山と道了堂跡

標高二百十三mの大塚山は、片倉村と鑑水村の境に位置し、往時には鑑水峠といわれていた。八王子方面から絹や生糸を積んだ馬車や、荷を背負った業商人が行き交った峠道であった。見晴らしが良く、奥多摩、丹沢の山々を眺めながら行商人や旅人達が一休みをした場所といわれている。

その大塚山山頂は、平たく公園となっているが、その昔、かつて道を行き交う旅人や、村内の安全を祈って「道了尊」を祀った道了堂があった。明治七年（一八七四）に鑑水の豪商（生糸商人）達が私財を出し、東京の浅草花川戸から道了尊を勧請し、翌明治八年（一八七五）御堂を造営安置したといわれている。昭和五十八年（一九八三）老朽化した廃屋は解体され、礎石のみを残した。その後、道了堂のあった場所は整地され、平成二年（一九九〇）大塚山

公園として整備された。

石段下の「絹の道」碑には左側に日本蚕糸業史蹟と刻まれ、右側には鑑水商人記念と刻まれている。この碑は「ふだん記」運動をはじめ全国に知られた故橋本義夫氏が同志に呼びかけて建てられたもの。

公園内には数多くの石造物があり、すべてが神奈川県丹沢の煤ヶ谷（すがや）産の石であり、石工の名が刻まれている。公園の周りには松林があり、江戸湾防備の台場を造るために台場の土台と土留めに使われた歴史もある。

道了尊（妙覚道了）は、相模坊道了尊者という実在の人物である。小田原の最乗寺の開山、了庵慧明（りょうあんえみよう）を助けて諸堂の建立に尽した。道了大薩垂などの名前を名乗っており、不明ながら十一面観音の化身となったとされている。この地に道了尊を勧請することで、街道の安全と村内の疫病除けを願ったものと思われる。



大塚山道了堂境内之図
(明治二十六年)



絹の道碑



道了堂跡入口 左は絹の道碑



倒れる前の灯籠



地震で倒れた灯籠



道了堂跡



旧道了堂

⑦歴史の道百選

大塚山の「絹の道」碑から大栗川に架かる御殿橋まで一・五kmが市の史蹟に指定され、鑓水三差路から未舗装の峠まで一kmを文化庁選定「歴史の道百選」に選ばれている。平成八年の事で、東京都で唯一八王子の「絹の道」が歴史の道として選ばれたものである。百選の中には、坂本竜馬の「脱藩の道」や上杉謙信の「塩の道」など土や石垣が残る全国の古道や運河などが決定している。



大塚山公園の三角点

●鑓水地名考

鑓水（やりみず）とは、節を抜いた竹を水が湧き出る山の斜面に突き刺し水を導いて甕（かめ）に貯え、甕から水があふれ出るように工夫したもの。遣り（つかわり）水という。その遣りが鑓（やり）に転化したと言われている。こうした方法で飲料水を得ていたから鑓水の名がついたとされている。



歴史の道百選に選ばれた浜街道
（絹の道）

●鑓水三叉路

御殿峠への谷道と、鑓水峠への尾根道に分かれる地点を三叉路と呼んでいる。中央の秋葉大権現（火除けの神）の石塔は、側面右に榛名山大権現（農耕の神）・金比羅大権現（海上安全の神）、左には鎮守御神前と彫られている。江戸時代末期鑓水村の人々が、代参でこれらの参拝を成して建立したと思われる。三叉路の右側には、百八十八カ所供養塔がある。この供養塔は、近畿、西国、関東、板東、埼玉、秩父の百カ所と、四国の八十八カ所全てを巡り終えた後の祈念碑であるという。



鑓水三叉路の石塔
右 浜街道（絹の道）
左 御殿山峠への近道



鑓水浜街道と農家



鑓水三叉路の石塔

● 幻の南津電気鉄道

鑓水三叉路の右端に高さ1m程の石碑がある。「此方鑓水停車場」と彫られている。この碑は、昭和三年十一月十日昭和天皇即位の御大典記念に際し、道路拡張によりここに移された。鑓水駅予定だった大栗川の御殿橋付近にあったものである。

鉄道計画は、鑓水商人の没落後、再び村の発展と復興を図ろうとする住民から起こった。それは、津久井方面の観光開発も兼ねた鉄道計画だった。路線は当時、京王電気軌道(株)

傘下の玉南電気鉄道沿線の多摩一宮から野猿街道沿いに鑓水を経由して津久井尻までの予定(将来は富士五湖まで延伸)だった。さらに、関東大震災後の建設ラッシュにあわせ国分寺方面への砂利運搬線も計画されていた。

鑓水村の人々が中心になって進め、大正十三年(一九二四)永泉寺で「南津電気鉄道株式会社」を設立し、昭

和三年(一九二八)柚木村の人々の期待を受けながら、路盤の工事が開始された。しかし昭和恐慌の影響や農村でも養蚕の不振から地元中心の資金集めも困難になった。昭和九年(一九三四)南津電気鉄道株式会社は解散。一度も電車は通ることなく地元出資者には大きな負債だけが残る結果になった。現在、その計画を伝える唯一の証が「絹の道」にある石碑である。現在は、計画された路線に並行するように京王相模原線が走っている。



鑓水停車場の石碑

⑧ 絹の道資料館

鏈水九八九—二

昭和六十年（一九八五）絹の道の保全と環境整備を目的とする基本構想により、生糸商で「石垣大尽」と呼ばれた八木下要右衛門家屋敷跡を昭和六十二年（一九八七）発掘調査し、遺構の確認や石垣の修復などを行った。その結果平成二年（一九九〇）三月四日、木造の門や入母屋屋根を持つ「絹の道資料館」を開館。

館内の展示物は、生糸や養蚕の生産技術、絹の道とキリスト教布教の関連性に言及したパネル、八木下家屋敷から出土した遺物、当時の資料や八木下と同時代に絹商人として活躍した大塚徳左衛門と大塚悉郎吉などの資料も展示されている。

野外には八木下家の遺構が石垣と共に残され、西洋館跡地には吾妻屋を建て、庭には休憩所もある。



絹の道資料館内部



絹の道資料館入口



鏈水村の山村（明治～大正）



遣り水(崖などに節を抜いた竹を突き刺し、しみ出てくる水を利用するところからきている)の再現



大塚文書



養蚕の図（錦絵）

● 鑓水商人の盛衰

浜街道といわれている道は、後に絹の道とも呼ばれた。生糸の輸出貿易が盛んなころの幕末から明治にかけて、八王子に集められた生糸を荷車や馬車に積み、また生糸を背負った生糸商人が鑓水峠を越え、鑓水の山里を通って横浜へ向かった。鑓水商人は、この生糸の流通で才覚を現し、生糸の共同出荷などの方式を取り入れ、生糸仲買（生糸取引）などで財を成していき「鑓水商人」と言われた。豪商達に支えられた鑓水の村は、「江戸鑓水」とも呼ばれるほど賑わっていた。

しかしその後、養蚕は機械化され製糸工場へと移り、家内製糸業は衰退していった。そして追い打ちをかけるように横浜から町田、相模原、片倉、八王子まで鉄道（横浜線）が開通した。これにより物資も人も鑓水の里は通らず直接八王子から横浜まで行くことになった。

さらに「松方デフレ」と呼ばれた緊縮財政が明治十四年（一八八一）に行われ、景気が悪化し米価、繭価が下落し負債農民が増え、明治十七年（一八八四）八月十日、数百人から千人の負債農民が御殿峠に集結する事態となった。世にいう武相困民党で、明治政府に対する庶民の抵抗の一端であった。しかし情報が漏れ、警察に阻止された。その他、豪商の継承問題や火災、強盗、それに県道から村道への格下げなどで鑓水商人は消え、鑓水という地名も一時地図の上からも消えて行った。

⑨ 伝一里塚の榎

資料館前の道を下った右側の崖に張り出すように古い榎の巨木がある。かつての一里塚跡といわれている。現在の八王子市の中心部に当たる八日町交差点から、ちょうど一里三十六町（三、九二七km）になり、この道を通る人々の道しるべであった。



里山の風景



山村から見た一里塚榎

⑩ 鑓水の諏訪神社

鑓水一〇七八ー一

勧請 寛永十一年（一六三四）

二月二十七日

祭神 建御名方命

（たけみなかたのみこと）

大国主命

（おおくぬしのみこと）

誉田別尊

（ほんだわけのみこと）

社宝

寛永・明歴・寛政の棟札

神額「夜光山」

再建

寛政十年（一七九八）十一月

例祭 四月十九日

明治期のはじめ、神社合祀政策があり、明治九年（一八七六）十一月二十五日、神谷戸の子の神社、日影谷戸の諏訪神社、片倉村の八幡神社を合祀し鑓水村の鎮守、諏訪三社宮（諏訪神社）として祀る。

社殿は本殿流造、拝殿を入母屋造に造営し、昭和二十九年九月三十日法人を設立。奥には三つの本殿があり、向って右から諏訪神社、子の神

（権現）神社、八幡神社の三神が祀られており、美しい彫刻が施されている。この三社と旧本殿は、八王子市の有形文化財に指定されている。

境内には鑓水商人が寄進した二基の石燈籠が神楽殿の広場入口に有り、台座には八木下氏、大塚氏と刻まれている。拝殿前にも石燈籠四基があり、その内の二基に八木下要右衛門、大塚徳左衛門の名が刻まれ、ありし日の鑓水商人の栄華が偲ばれる。

この鳥居は両部鳥居（権現鳥居）になっていて、神様と仏様をいっしょに合わせて祭る神社に建てられる形式をとっている。

子の神社と諏訪神社は以前永泉寺が管理していた。鳥居は当時のなごりである。



鑓水商人の名前が刻まれている灯籠



諏訪神社本殿



諏訪神社鳥居



諏訪神社本殿内部



八王子絹の道道標

⑪ 八王子道の道標

一里塚跡から南へ下がり、大栗川に架かる御殿橋近くに八王子道の道標（鑑水の道標）が立っている。

正面に「此方八王子道」右側面に「此方らは町田、神奈川、ふじさわ」左側面「此方はし本、津久井、大山」裏面「慶応元年（一八六五）仲秋建立」と刻まれている。生糸貿易が栄え、鑑水の村にも活気があふれていた頃、各方面から村を通る生糸業者の道しるべとして建てられたとおもわれる。御殿橋には「大塚山道了堂境内之図」が再現されている。

⑫ 高雲山 永泉寺

鑓水八十

宗派 曹洞宗
 本尊 釈迦無尼仏
 寺宝 聖観世音菩薩
 開山 薬師瑠璃光如来
 開基 岳應義堅
 開創 永野和泉
 弘治年間（一五五五〜八）



御殿橋脇の八王子道標

武田家の家臣、永野和泉が当地に移住し庵を建て「覚峰文公」と改名したのが当寺の開基といわれる。

その後、天正元年（一五七三）永林寺の岳應義堅大和尚が「法地院」として開山したとある。

明治六年（一八七三）本堂に旧鑓水小学校が創立されたが、後に諏訪神社下に移る。現在の鑓水小学校は、平成十年に団地内に出来た。明治十八年（一八八五）火災に遭い本堂を全焼したため、鑓水商人の八木下要右衛門の母屋を移築した。火災の原因は祭礼の打ち上げ花火の火の粉が大塚徳左衛門邸の屋根に飛散り出火、それが飛び火で永泉寺に燃え移り全焼した。その後、増改築し現在に至っている。

境内には芭蕉堂や芭蕉の句碑などがあり、文化活動も盛んだった事が伺える。そのほか数々の石造物が鑓水商人の手で寄進されており生糸商人縁の墓地でもある。武相観音十四番札所となっている。



永泉寺本堂



永泉寺山門



大塚徳左衛門の墓



欄間の彫刻



八木下家の墓



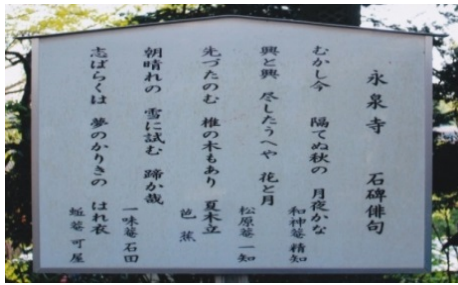
大塚五郎吉の墓



芭蕉句碑



観音堂の天井画（雲龍）



石碑俳句の説明版



小泉屋敷の案内板と
都府民民俗文化財碑

⑬ 小泉屋敷 都

鑓水にある民家。柚木街道を渡り、浜街道を浜見場の峠に向かうと左側に見える。茅葺き屋根は、明治十一年（一八七八）に再建築された。この民家は、典型的な養蚕農家の屋敷である。入母屋造りで、田の字型の間取り。屋根裏は蚕室となっている。裏山には、屋敷墓地の形態を伝える墓石もある。

母屋、土蔵、納屋、推肥小屋などの他、裏山も含めて屋敷全体が昭和四十七年（一九七二）四月十九日、東京都の有形民俗文化財に指定された。

鑓水二一七八



小泉屋敷内部



小泉屋敷

◎参考資料

- ・菊地正先生レジュメ 菊地正著
- ・歴史と浪漫の散歩道
- ・由井の自然と 八王子市教育委員会
- ・歴史にふれあう散策道 東南部環境市民の会
- ・東京都の歴史散歩 山川出版
- ・多摩の街道 けやき出版
- ・東京都の歴史 山川出版
- ・八王子辞典 かたくら書店
- ・プチ・トラベル「くるくず」
- ・インターナット各ページ
- ・八王子市郷土資料館資料
- ・八王子市地図
- ・八王子市観光マップ
- ・昭文社